

雜 纂

遼陽喇嘛墳碑文の解説補正

鴛 淵 一

嘗て筆者は「内藤博士還曆祝賀支那學論叢」に「遼陽喇嘛墳碑文の解説」なる一文を載せ、喇嘛墳に現存する清初の二碑文に關しての解説を試みた。乃ち右の二碑は、太宗天聰四年孟夏と世祖順治十五年七月に建立されたもので、共に清初太祖の時代に西藏より蒙古を経て滿洲の地に巡錫し、太祖の絶大なる保護を受けて此に歿した所の大金喇嘛法師幹祿打兒罕囊素の追悼記念の爲に建てられたものである。而して筆者は右解説の最後に於て、この碑文に關して特に注意さるべき五項を擧げて結語にかへたが、その個條は、(一)天聰四年の碑文は清朝時代の碑

文として最も古いものの一として注意すべく然も其の滿文が無圈點字母である事は滿洲語學上頗る興味ある事、(二)二碑文により清初に於ける此方面の佛教(喇嘛教)の信仰が相當盛んであつた事、清朝天子の喇嘛教に對する態度を知り得る事、(三)清初に於ける喇嘛教と遼陽との密接なる關係を知る事、(四)大喇嘛の外に白喇嘛の事績を知り得ると共に、清朝天子が是等法師を利用した點に興味を覺ゆる事、(五)天聰四年の碑文の撰者に加圈點字母の完成者として、又清初滿洲人第一の學者たる達海が加はつて居るのを注意すべき事等であつた。この結語と

も稱すべき諸項目は今日でも筆者の考慮の限りに於て變る所ないが、解説そのものに就ては、史料の引用利用に於て、論旨の點に於て甚だ不充分であつて、今にして思へば衷心甚だ忸怩たるものがあり、大に改訂補正を要するのである。故に他日機を得てこれが全體に互つて改訂補正し、或は異つた立場からして論述したいと考へて居るが、差當つて茲に本誌の餘白を借り、極めて一部分に過ぎないが、天聰四年建立の無圈點滿洲字の碑文の解説のみの補正をなし、又其の事蹟不明と前に述べた喇嘛法師關係の記事が幸に滿文老檔に認められるので、その事蹟の一端を滿文老檔によつて少しく補ふ事にしよう。

○
無圈點字母滿洲字にて刻された天聰四年の碑文の全文は略々次の通りであつて、尙數語不明の所あるも殆んど全部を解説し得たと信ずる。次の譯文中傍に單線を引く所が即ち新たに讀み得て茲に補ふ語句であり、複線を引く所は訂正した語であるが、是に由れば如何に先年の譯讀が不充分であつたかを知り赤面の至りにたへぬ次第で

ある。(因にI II IIIの數字は(神刻文の行數を示す))

I aisin gurun i uring (?) darhan nangsu lama i
金 國 ノ 翰 祿 打兒罕 囊素 喇嘛 ノ
giran (?) i subargan.
屍 ノ 墳(塔)

II lama fujih do oron i bai niyalma. fujih
喇嘛 佛 ノ 地 ノ 人 佛 ノ
bade banjibi, umengi dor be tacihi. amba
地ニ生シ 眞ノ 法ヲ學ビ 大

III dor be halubi. gurun cihen ergenge be
法ヲ解通シ 意 諸 生靈ヲ
donji seme. olhon muke de yabure be
陸 水ニ行クヲ

IV senguwenderakti. šin dekdere ergi monggo
憚ラズ 日 泛ノ 方 蒙古
gurun de jibi fujih dor be aleimbune
國ニ來リ 佛 法ヲ 宣シ
seljeyeme
傳クテ

V ul (uhbunmbi, nlabi) geren be gemu
衆ヲ皆
ud (道曉セシメ、傳へ)

fujhi forgon de dosimbune (?) yabubi (?).

佛 曆、運 ニ 入ラシメ 行キ

amala musei gurun de jidere jakade.

後 吾ガ 國 ニ 來ルニ 際シ

VI gengiyen han ambula (?) . . . kundulehe.

英明 汗(皇帝)甚々 尊敬セリ 敬禮セリ

abkai fulingga šahn toko aniya jakūn biyai

天 命 辛 酉 年 八 月

orin emu de lama anasi
二十一 日 喇嘛 西リ

VII bederehe manggi

歸リシ ニ ヨリ

VIII gengiyen han hendume subangan arabi

英 明 汗 勅シテ 日々 墳(塔)ヲ 建テ

giran sinda sehe bike. aniya dari dain

屍ヲ 藏セテ 言ヒタリキ 累 年 軍旅

čooha jabduhakti bihe manggi

兵 遣アラザリシ 爲(ニヨリ)

IX sure han i duci aniya lama i emu šajin i deo

天 聰ノ 四 年 喇嘛ノ 同 門ノ 弟

ba lama,
白 喇嘛

X han de gisun . . . wesimbubi

汗ニ 語 奏シ

XI han i hese. jakūn beisei gisun i sure han

汗ノ 勅 八 貝勒等ノ 旨ヲ 以テ 天 聰

i duci aniya šanggyan morin aniya juwari

ノ 四 年 庚 午 年 夏

ujū biyai sain inengeri

初メノ 月 吉 日

XII han i hesei ulara (?) be kadalange

汗ノ 勅ヲ 以テ(欽差)工 ヲ 管スル

hojlon sumigüwan tung yang sing atabi.

婿(駙馬) 總兵官 佟 養 性 委(?)

tūšan . . . enge

官

XIII beigüwan tsai yung niyen.

備 禦 蔡 永 年

右の滿文が之に併記されて居る漢文と其意に於て大體同じである事は言ふ迄もないが、辭句の上にて多少省略されて居る所あるは兩者を比べる時に知り得られる。併しそれより興味ある事は、この滿文が無圈點字母である爲字形に於て蒙古字體を有するものある事、加圈點字

母に比してはるかに古形を有するもの有る事で、これは其字體の變遷と又音韻の變化を知る上に於て注意すべき事でないかと思ふのである。例へば現在「佛」は *fudin* と記されるが碑文では *fudin* となれる事は、 \vee の變化を示すものであり、碑文中 *hanji*, *arai* 等の如く語尾が *bi* に記されて居るものは、現在では \vee と記されるものであつて、文典上 *Past gerund* (過去動詞狀名詞) とし「 \vee し、 \vee したる後」の意味を示すものに外ならぬが、之も \vee の變化を示すか或は \vee の音が \vee の形にて表はされたか、即ち無圈點字母にては其間區別がなかつたといふ事を示すのでないかと思ふ。之は嘗つて李德啓氏が「阿濟格略明事件之滿文木牌」の附録に收載された「無圈點字書」の例中にも見える事であつて、それには無圈點の *bi*, *bi* に當る綴字を凡て加圈點では \vee によまして居るのである。尙この事は加圈點の \vee が無圈點では *we* (*wa*) *fe* (*fa*) の一體に寫されたのと同様の意味のものと思はれるのであつて、兩體交替に際しての一種の過渡的字體とみるべきであらう。尙漢文の八王即ち「八和

碩貝勒等」を表はすに碑文では單に *hakim beise* (八貝勒等の義。種々議論あるが *beise* は此際貝子の對音でなく *beie*。貝勒の複數形と見るべきであつて、其事は滿文滿洲實錄、滿文老檔と清朝實錄とを比較する時直に知り得る所である) と略語を用ゐて居る。併し之が滿洲語としての八王の適用語であつたかと考へる。又漢文の總兵官に當る語を碑文では *sumingguan* とよまれる如く刻して居る。此語も前記李德啓氏の報告中にも認められ、氏は譯寫して *zuningguan* として居るが、原牌には明らかに *sumingguan* とよまれる如く記してある。之は恐らく「總」の支那音に合せしめん爲第一綴を *sum* と寫されたのでないかと思はれるのであつて、同様に「達」の滿字 *sum* と讀まれるのを氏が *zuni* に寫して居るのも支那音に因つた爲と思はれる。従つて筆者は原字により *s* によんで差支ないと思ふが、但初め無圈點字母の時に前記 \vee と \vee との場合と同じやうに *sun* \vee とは未だ區別なく、 \vee の如き特殊の字母はなかつたから、 \vee の如き支那音を寫すに \vee を以てしたものと解して \vee によん

でも強ち誤りとは言へないであらう。又その *ming* と記すのは「總」の韻の *ng* と「兵」の *ng* とが合成轉訛した結果か、或は滿洲人の耳に響いた音をそのまま記したによるものであらうか。

以上の事項は譯寫の際直に氣付く所であつて、前回には考へ及ばなかつた點であるので、茲に併せ記して參考に資する次第である。

○

次に記したいのは右碑文の主人公である大金喇嘛法師即ち韓祿打兒罕囊素の事蹟に關する事である。先に譯出した際は之に關係ある他の記事を知るに至らず何等觸れる所なかつたが、近時「滿文老檔」を繙くに及びこの檔中に法師關係の記事の存するを知つたので茲に追補する事にした。い。「滿文老檔」に見えるのは、碑文に記される如く法師の寂滅の年たる天命辛酉即ち六年八月の條ではなく、其の翌年の七年三月の條である。乃ち老檔卷四十四、天命七年三月二十二日の條に次の如く記されて居る。

monggo i kor'in i nangsu lama genggjen han i
蒙古ノ科爾沁ノ囊素喇嘛 英明 汗ノ
jine kundere sain be donjif, sa'ungga juwe
養ヒ尊敬スル事ノ善ナルヲ聞キ〔蘇冲阿〕兩
jergi jif genche. iyoodung be baha mangi
度來リ往ケリ 遼東(遼陽)ヲ得タル時(ニヨリ)
tere lama jif hendume bi mini baci jidere de
ソノ喇嘛來リ 曰ク 吾吾ガ地ヨリ來ル時
beye sain i jinekü kemuni nimeme jife mini
身體良クテ來ラザリキ却ツテ病ミテ來レリ 吾ガ
dolo gūnime jhengge. genggjen han i jakade
心中ニ思ヒテ來レル事ハ 英明 汗ノ爲ニ
sian waiyaci seme jibe seme henduf. godahakü
屍ヲ捨テントテ來レルト 言ハリ 久シカラ
beye manggafai nimere de. lama hendume. minbe
身體 弱リテ 病ムニ(時)喇嘛 曰ク 吾ヲ
posici. but'che manggi mini giran be ere iyoodung
慈マン 死セラル 後 吾ガ 屍ヲコノ 遼東(遼陽)
de bage ba lama de atabuf juktebu seme henduf.
ニテ〔巴噶巴〕喇嘛ニ付シテ祀ヘヨト 言ヒテハ
sahn coko aniya tuweii juwan biyade akti oho.
辛 酉 年 冬 十 月 無クナレリ(死セリ)
siran be iyoodung ni he'en i julergi dukai tūle hana
屍ヲ遼東(遼陽)ノ城ノ南門ノ外哈納

zanjiyang ni yafan i toksio i boode niyoo arahi
 參將ノ圍子ノ屯ノ房舎ニ廟ヲ建テ
 sindaha manggi. gengiyen han. ba lama be
 安置セル後 英明 汗ハ〔巴〕喇嘛ヲシテ
 jikte seme atabuhla. nangsu lama i harangga
 祀レヨト 付托セリ 囊素 喇嘛ノ部下ナル
 jagen korcin de bilhe ninju han boigon be
 女真人ノ 科爾沁ニアリシ六十三 戸ヲ
 (奴才)
 tunusi gebunge niyahna be takurai gail. nikan i
 ト云クル 人ヲ遣ハシ伴ヒテ 支那ノ (明)

emu pu be bufi lama i giran i jakade tabuhe.
 一 堡ヲ與ハ喇嘛ノ屍ノ爲ニ設ケタリ
 jai gahabune tuwali susai sunja beri saenganaha.
 又 射ラシメテ 看テ 五十 五 弓 賞シタリ
 susai uksin susai morin. oim eihen takifara
 五十ノ 甲 五十ノ 馬 二十ノ 驢 使用スル
 alha susai haha susai hehe buhe. (譯文中括弧
 奴僕 五十ノ 男 五十ノ 女ヲ 與ヘタリ (附したの
 は金梁氏滿洲老檔)
 秘録の譯寫による)

以上が即ち法師關係の記事の全文であつて、碑文の説
 いて盡さぬ所を補足して餘りあり、能く蒙古科爾沁と法
 師の關係、清太祖と法師との關係、太祖の厚遇、寂滅後

の情況等を知り得て興味ありと考へる。殊に法師が科爾
 沁から來た事は太祖の蒙古經略上に於ける一の派生的事
 件として單に政略的意味を持つ事件に文化史的意義の存
 する事を知り得るわけでその點大に注意すべき價值あり
 と思ふのである。尙右の滿文老檔の記事は、金梁氏滿洲
 老檔秘録上編に次の如く漢譯されてあるので、此に記し
 て參考に資する事にしたい。

囊蘇喇嘛請葬於遼陽 天命七年三月

蒙古科爾沁之囊蘇喇嘛聞上禮養賢者。使蘇冲阿來二次而
 去。得遼陽後喇嘛來曰。我由科爾沁來時身體不適已抱有
 病。我實願來雖棄我骸骨而不惜。未幾病革。喇嘛曰。上
 如愛我我死後以我骸骨交與左遼陽之巴噶巴喇嘛令其祀
 之。於乙酉年冬十月故。遂送其骸骨於遼陽城南門外參將
 哈納之園屯舍內修廟治葬。後乃命交與巴喇嘛令其奉祀。
 金梁氏の譯書の文は滿文老檔の原文に比べる時、常に
 省略に附せられた點あるを認めるが、此に擧げた漢譯に
 於ても亦同様である。然し原文とこの譯文とを併せみる
 時、當時の事情狀況が充分に知悉されると思ふ。

(昭和十二年八月二十九日稿)